

☆インドネシア：イスラーム教徒がサンタクロースの服装をすることを禁じる☆

インドネシアのイスラーム指導者会議（MUI）は今年15日クリスマスの期間に非イスラームの伝統を象徴する服装やアクセサリをつけることを禁じる宗教裁定（ファウタ）を可決した。

Asia Newsによればこの宗教令は、サンタクロースの服装や他のクリスマスのアクセサリのような非イスラームの物品を使うことを禁じるものだ。イスラーム指導者会議の議長である、イスラームのリーダー、ハサヌディーン師は「宗教的絵画やアクセサリは当人がどの宗教に属しているかを示すために意識的に使われ、その宗教の伝統や儀式を表す。そのため、非イスラームのアクセサリを使うことも、イスラーム教徒にその使用を頼むことも、法律に反する」と説明する。そして、この宗教裁定は現在インドネシアのあらゆるところで広がっているクリスマスの雰囲気に対する対策であると付け加える。バーやスーパーマーケットではどこでもサンタクロースがいて、キリスト教的と思われるアクセサリの広告がいたるところで見られる。この伝統はイスラームの信仰をひどく害するとハサヌディーン師は主張する。

イスラーム指導者会議は信者たちにイスラームの信仰と他の宗教的伝統を「混同しない」ように要求した。信者はクリスマスの商品を売ることも買うことも禁じられる。雇用者は、イスラーム教の店員にサンタクロースの格好をさせることも禁じられる。昨日、イスラーム強硬組織であるイスラーム擁護前線〔FPI〕のある会員たちは、ジャワ島西部にあるベカシの自動車の特約店に攻撃を加え、店員にクリスマスの衣装をつけさせようとした店主を脅迫した。（Zenit- Roma, 2016年12月16日。）

☆2016年には約400万人がバチカンで教皇に謁見☆

今年バチカンで様々な機会にローマ教皇と謁見した人の数は約400万人に及んだ。それは一般謁見、特別謁見、聖年の謁見、ミサ、正午のアンジェラス（あるいはレジナ・チェリ）の祈りの際に、教皇に会いに来た人の数である。

教皇官邸管理室の長官は、イベントの参加申請と配られたチケットの数を公表した。この他にも、聖ペトロ広場で日曜日の正午に教皇と一緒にアンジェラスやレジナ・チェリを祈るため、あるいは他の様々な祝いに参加するために広場に集まった人の数も勘定に入れた。月ごとに見れば、数が最も多いのが聖週間と重なった3月で、次に9月であるが、これはマザー・テレサの列聖式が行われた月である。



この統計はバチカンに集まった人の数だけを対象にしている。教皇がローマの小教区教会（教皇はローマ教区の司教でもある）、またイタリアの諸教会を訪れた際に集まった人数や、あるいは外国訪問の際に集まった人々の人数は含まれていない。（Zenit – Roma、2016年12月29日）

☆幼児殉教者のミサ。ベトレヘムで、戦争や堕胎の犠牲になった子どもたちのため☆

聖地準管区長は今年も12月28日にベトレヘムで聖なる幼児殉教者たちの荘厳ミサを司式した。この虐殺が行われた町（ベトレヘム）には幼児殉教者を記念する洞窟があり、その中で聖地準管区長代理ドブロミル・ヤスタル Dobromir Jaształ 師が他の修道士とともにミサをたてた。アデステ・フィデレスやその他のクリスマスの聖歌が典礼に花を添えた。

ドブロミル師はミサの説教のなかで「聖なる降誕祭の直後に幼子殉教者の祝いをすることは、この無実の犠牲者たちをキリストの同伴者に数えることを望んだ教会の伝統によっている」と指摘した。

「現代では、この虐殺は特別の意味を持っている。なぜなら、ヘロデ王によって殺された罪のない子どもたちは、世界のあちこちで我々の目の前で起こっている無数の衝突のなかで殺されている何百万の子どもたちを代表しているからだ。」しかし、それだけでなく「まだ母親の胎内で殺される膨大な数の胎児、墮胎を人間の権利として容認する多くの国々の企業や政府によって死刑に処せられた無数の胎児をも代表している」と付け加えた。 後略 (Zenit – Roma、2016年12月29日)

《注、聖地準管区とは、中世に聖地の諸聖堂と巡礼者の保護を教皇から委託されたフランシスコ会の独立組織体。『カトリック大辞典』「聖地準管区」より》

☆モスクワの総主教：ロシア革命の悲劇を記念するのは、過ちを繰り返さないため☆

モスクワの総主教キリル司教は、ロシア正教会の最高会議の会合において、今年催されるロシア革命の100周年記念について言及した。

そして、「この悲劇を祝うということではなく、この事件を記念する」ということで、それは「一世紀前に起こった過ちを思い出すことによって、ロシア正教圏の人々に、二度と同じ過ちを許さないことを教える」ことだと指摘した。

キリル司教は、1917年2月から10月の間に帝政を打倒したボルシェヴィキ革命の100年記念は、以前は一つの国家に属していたが、現在は歴史的、精神的、文化的な強い絆で結ばれている国々から構成されている地域のための誠実な祈りと深い反省が伴わねばならないとした。

キリル司教は「祝う」という言葉は不適切と切り捨て、「ロシアと他のロシア正教の国々は近年困難な状況にあること、なかでもシリアと全中東の危険な状況にある」ことを指摘した。さらに付け加えて、「我々が言うこととなすことのすべては、ロシア正教が広がっているすべての民族の善を目指さねばならない。・・神の恩恵によって、状況を悪化させたであろう行動を避けることができた」と言う。ウクライナの危機に触れて、衝突が解決策を見だし平和が回復されるように望むと言い、教会は祈りによってウクライナの人々にも奉仕しなければならないと励ました。(Zenit – Roma、2017年1月5日)

《注、モスクワ総主教はロシア正教の最高の指導者。

1917年のロシア革命によって無神論を奉じるソヴィエト政権が成立すると、多数の聖堂や修道院が閉鎖され財産が没収された。・・聖職者や信者が外国のスパイなどの嫌疑で逮捕され、多数の者が処刑され致命した。日本正教会の京都主教を務めていたことのあるペルミの聖アンドロニクは生き埋めにされた上で銃殺されたことで知られている。ニコライを2世をはじめとする皇帝一家も幼少の皇子に



皇帝ニコライ2世一家 至るまで

全員が銃殺刑に処された。1921年から1923年の間だけで、主教28人、司祭2691人、修道士1962人、修道女3447人、その他信徒多数が処刑されたが、1918年から1930年にかけてみれば、およそ4万2千人の聖職者が殺され、1930年代にも3万から3万5千の司祭が銃殺もしくは投獄された。1937年と

1938年には52人の主教のうち40人が銃殺された。『ロシア正教の歴史』Wikipedia より》